

『文藝』1987年季刊夏季号

としてかわかった。  
高木有さんと一緒に仕事したのは、河出書房新社刊の『文藝』に毎号書いていた時期の一九八七年に、荒俣宏さんと共編著で『神秘学カタログ』を出したあたりからだ。それから、一九九〇年には、『聖トポロジ―意識と場所Ⅰ』『異界のフォノロジー―意識と場所Ⅱ』の二冊本を河出書房新社から刊行した。  
その後一〇年以上経って、二〇〇二年に、公益財団法人日本心霊科学協会の月刊誌「心霊研究」誌に連載していたものをまとめた『平田篤胤

## 鎌田東二の 歩んできた 霊的人生

### 自伝 第2回 注目すべき人々との 出逢い ①ふしぎなえにし

七四歳の誕生日に、三冊の本を出した。

日本臨床宗教師会編『スピリチュアルケア 臨床宗教師によるインタビューフェイス実践の試み』『日本人の死生観Ⅰ 霊性の思想史』『日本人の死生観Ⅱ 霊性の個人史』。

三冊ともに、飯田橋にある作品社から、二〇二五年三月二〇日に同時出版した。

#### ■今年の誕生日に出した三冊の本

今どきの出版不況のなかで、どうして三冊も同じ出版社から同じ日に出版できたのか？ もちろん自費出版ではない。これも「不思議な縁」と言うしかないが、その「不思議な縁」を手繰っていくと、「小さな奇蹟」の連鎖のような「不思議な縁」が浮かび上がってくる。これを「霊的（スピリチュアル）」と言うことのできないことはない。

の神界フィールドワーク』、二〇〇三年に『神道のスピリチュアリティ』を「神道ソング」や「石笛」や「法螺貝」などの奉奏付録（CD）付きで作品社から出版。二〇〇五年には、『霊性の文学誌』、二〇〇六年に『霊的人間―魂のアルケオロジ―』、二〇〇八年に『神楽感覚』（細野晴臣との共著）、そして一五年以上経って、最期の三冊。

神道ソングを入れたCD付き本『神道のスピリチュアリティ』や、細野晴臣さんとの聖地巡礼の旅を収録したDVD付きの本『神楽感覚』など、すいぶんわがままも通してもらったし、無理も聞いてもらった。そのぶん、ユニークで、オリジナリティ満載の本になったことは間違いない。

これまで、一〇〇冊以上の本を書き、最後の三冊を高木さんのまとめ

この「縁」と「奇蹟」をつないだキーマンが、長いこと作品社の代表編集者（社長と同格）を務めてきた高木有さんだった。

高木有氏は、早稲田大学政治経済学部政治学科卒業後、河出書房新社に入社し、五〇年以上編集者として、さまざまな作家・詩人・思想家・学者を育ててきた。その炯眼と能力については、周りの者たちや当時の同僚・後輩たちには惧れと畏敬の念をもって共有されている。

一九八〇年代初めに月刊誌『文藝』に配属され、「大物」の中上健次や大江健三郎や吉本隆明を担当。一九八四年から一九九二年まで編集長を務めた。私が初めて『文藝』の原稿を書いたのは、たぶん一九八七年「文藝夏季号」からだ。それからほぼ四〇年。高木さんが編集長だった時期に、私は執筆できないし著者と締めで出版できることを心から感謝している。

『日本人の死生観Ⅰ 霊性の思想史』の「あとがき」にこう書いた。  
「学問」には、①「道としての学問」、②「方法としての学問」、③「表現としての学問」の三種があるという年来の持論を証明するために、本書『日本人の死生観Ⅰ・Ⅱ』をあえて二冊本として世に問う。おそらく、これがわが最期の著作、いわゆる「遺作」になるだろう。

だから、破れかぶれでもいい、というわけではないが、もともと、無鉄砲で、破れかぶれで、「犬も歩けば棒に当たる」にして「捕らぬ狸の皮算用」人生を歩んできたわが身であってみれば、こんな著作が最期になるのも悪くない。

本書は、作品社の高木有氏の誘い

## 『日本人の死生観』目次 (当初の構想)

序章	能登からの発信—能登地震と大雨の二重被害が警告すること 超越の回路～両義性の場所から
第一章	真脇遺跡と縄文の死生観
第二章	神道のあの世観と仏教のあの世観
第三章	聖徳太子、空海、源信、法然、親鸞、一遍の死生観
第四章	吉田兼俱の隠幽教
第五章	本居宣長と平田篤胤の死生観
第六章	明治十五年の祭神論争
第七章	出口王仁三郎—出雲神族の二度の敗退
終章	地球の呼び声に応える

だがステージⅣのがんの進展により、当初の目論見の目次どおりの論述を達成することはできなかった。ここに、作品社の名うての編集者高木有氏に心からおわび申し上げる。ごめんなさい。

たしかに、高木有氏と約束した論述どおりにはいかなかったが、本書『日本人の死生観Ⅰ・Ⅱ』が今できるせめてもの約束の果たし方である。

二〇二四年十一月二十五日  
憂国忌に 鎌田東二拝

## ■「同行二人」の編集者と最期の本

作家も思想家も独りで自立できるわけではない。そこに、人生をかけて伴走してくれる「同行二人」が要る。一人では旅立てないのだ。産婆が、とりあげじいさんが要るのだ。「同行二人」が不可欠なのだ。生まれる時も、死ぬ時も、独り(一人)ではない。「同行者」がいるのだ。その「引き上げ」と「押し出し」

によって成立した。一九八〇年代の終わり、高木有氏が河出書房新社発行の『文藝』編集長であった時代に原稿を依頼されて何本か間に合わせた。以来、三五年ほどのお付き合い、ということになる。

高木さんと同じ『文藝』編集部の長田さんに連れられて新宿の文芸酒場に行った時のこと。

先客に、「文豪」中上健次がいた。たしか、当時『海燕』(福武書店刊)編集長だった寺田博と和氣諒々とした感じで、語り合い、盃を交わしていたはずの中上が突然暴れだした。大声で「おまえが日本の文学をダメにしたんだ!」とかなんとか、罵詈雑言している感じだった。

三五年以上も前のことなので、記憶ははっきりしないが、その豹変ぶりに驚きはしなかったが、中上の痛みと哀しみを「スサノヲみたいなヤ

ツだな」と思ったことを鮮明に覚えている。

その中上もほどなくして、がんで死んだ。タイのバンコクにいる時に、その訃報を知った。

その少し前に、私は中上健次と対談をしていた。その対談は、中上の没後、夫人の作家・紀和鏡のチェックが入ったうえで、中上没後の一九九三年に、主婦の友社から『言霊の天地』と題して出版された。

破天荒な、「おもしろい」対談だったが、私も、その時、中上の「暴風」にさらされた。

「おまえが日本の神道をダメにしたんだ!」とはっきりと言われはしなかったが、「おまえの神道論にはサルタヒコも天皇もいない」とカミナリを落とされた。

そのとおりだ。  
国つ神の神道論を研究することを

る。これがせいっぱい。心残りです。いっばいだが、あきらめる。さらば、この世よ。

わがみちをどこまでいけども

はてしなく とほうにくれても  
みちなきみちをゆく

出雲の神と大本の神に誓ってから神道研究の道に入った私には、サルタヒコも天皇もいなかった。たしかに、もちろん、スサノヲや大國主や大物主など、出雲(系)の神々はわんさかいたが。

その出雲の神々の系譜が、縄文から出雲神話や出雲大社や出雲系および三輪山系神社をとおして、また平田篤胤の「幽世(かくりよ)」神学の探究をとおして、隠退した神「うしとらのこんじん」を主神と仰ぐ大本にまでつながり、本書『日本人の死生観Ⅰ・Ⅱ』にまで連綿たるいのちといぶきを吹き貫きいることは、確信をもって記しておきたい。

最初、高木有さんとの話し合いのなかでは、本書は57ページに掲載した表組「『日本人の死生観』目次(当初の構想)」のような構成になるはずだった。

押し込み」によって、作家も研究者も徐々に一本立ちし、自由に旅し、遍歴できるようになるのだ。

私にとって、そのような「同行二人」の編集者が高木有だった。

高木さんは、私に作家の「たましい」のありかを教えてくれた。中上健次の例示をとおして、『文藝』を生き抜くのは「いのちがけだぞ!」、「生半可で、中途半端な『文藝』の原稿なぞ書いていけば、すぐいのちを落とすぞ!」。

実際、わが一年先輩の作家・佐藤泰志は、芥川賞に五度、三島由紀夫賞に一度ノミネートされたが受賞できず、平成二年(一九九〇)一〇月一〇日に、国分寺のアパート近くで首を吊って自殺した。享年四〇歳。國學院大學文学部哲学科の教室で、私は一度だけ佐藤と激しい口論をした。ニーチェ論を卒業論文に書

いた佐藤の思考が甘い、甘すぎる、ひ弱だ、ニーチェはそこに辛みを、しょっぱみを、破滅的な強靱さをぶち込んだ。これでもか、これでもかと。

佐藤よ、おまえに、その激烈な香料をぶち込み、食べる覚悟はあるのか？ その覚悟がなければ、作家としても、思想家としても、いのちをなくすぞ。

佐藤の死後四二年経って、河出文庫本になっている佐藤泰志と再会した。佐藤が通った函館の小学校を改築した函館市の公共施設で。

高木有は、『文藝』編集長として、佐藤泰志の小説と鎌田東二の論文を三度同時掲載した。そこに、どんな意図があったか知らない。

だが、私は、佐藤泰志がああ激論を交わした佐藤だと知らずに『文

藝』を読み飛ばしていた。完全なるすれ違いだ。もし、佐藤の小説を読んでいたら、その時、違う言葉を高木有をとおしてか、直接会って佐藤に伝えただろう。

高木有は、永山則夫に自叙伝を書かせた編集者だ。肺腑を抉る文章を作家や思想家に迫る編集長だ。妥協はない。

わが人生「最期の著作」をそんな編集者に鞭打たれ、蜜を嘗めさせられて、三冊も同時にこの世に送り込まれた鎌田東二は「宇宙一の果報者」だと思う。

ありがとう。高木有よ！ これが編集者としてのあなたの最後の仕事。これが神道神学者としての吾の最期の著作。人生最期を「同行二人」できて、鎌田東二はしあわせである。

さらば高木よ

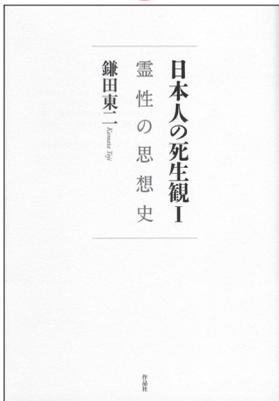
花に嵐のたとえもあるさ  
さよならだけが 人生さ

ことばてふ なんぎなものを

だきしめて

いきつもどりつ しましまをへる

二〇二五年四月二日記  
高木の死生観の



日本人の死生観 I 霊性の思想史